

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720253

研究課題名(和文)形状表現に注目した対比における意味変化のメカニズム

研究課題名(英文)On semantic change on oppositional expressions regarding figures

研究代表者

有光 奈美 (ARIMITSU, NAMI)

東洋大学・経営学部・准教授

研究者番号：00408957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：論文「On Semantic Shifts to Intensifiers from the Viewpoints of Negativeness and Completeness」が中心的貢献である。Completenessに関わる形状表現が諸言語で強意語になりうる動機付けは本能的な生物の生存目的や進化の目的と結びつくと考えに至った。自然界の特定の形状・視覚的刺激に安定や好ましさや望ましさを感じるのはBarrow (1995)のadaptive featuresの視点を導入できる。言語の意味変化も人間の進化・適者生存という本能的要因と学習や経験から得る後天的要因との融合的要素が背景にある。

研究成果の概要(英文)：My paper "On Semantic Shifts to Intensifiers from the Viewpoints of Negativeness and Completeness" is the major contribution of this research.

研究分野：認知言語学、語用論

キーワード：意味変化 形状 望ましさ 認知 進化、適者生存

1. 研究開始当初の背景

強意語の意味変化のメカニズムに関する先行研究は、国内・国外において盛んに行われている。Stoffel 1901, Paradis 1997, 2000a, 2000b, 2001, 2003, Traugott 2006, Athanasiadou 2007, Shindo 2007 等を挙げることができる。申請者は、強意語の意味変化のメカニズムの中でも、対比表現に注目して研究を行ってきた。対比表現には非対称性があり、対比の中でも、片方の側だけが意味変化を起こし、もう片方の側は意味変化を起こさないことがあること等を明らかにしてきた。たとえば、生死の対比においては、dead right (全く正しい) のように dead は強意語になりうるが、alive は字義通りの生命としての生きている状態を表すのみで、強意語としての意味変化は存在していない。cold/hot の対比では cold の側だけが「完全に」の意の強意語となる。また、否定的価値の視点から見ると awfully, terribly, horribly 等も強意語として使用されうるが、dead や cold のような「完全さ」とは異なり、「とても」という extremely や very のような極限の無い程度を表わすのみである。dead や cold は、「死」や「完全なる意識や熱の非存在」という究極の無の終着点がある。それに対して、awfully, terribly, horribly 等は、その「ひどさ」に終着点がないため「完全に」の意味は持たず、極限の無い程度である「とても」を表わすことを指摘してきた。dead は生死という二項対立的な矛盾関係の対比 contradictory opposition に類し、生の終わり、生の対比の極限にある生命の完全な「無」であり、否定は肯定に対して有標 marked という特徴が動機付けとなっており、dead のような語が「完全さ」を表わす強意語になりうることを明らかにしてきた。その他、under であれば物理的・地理的な空間表現としての下を表すだけでなく条件節を導くことが可能であるが、上を表す表現では条件節は導かない。中国語と日本語の「上下」を対照研究すると、両言語の意味変化には非対称性が存在している。こうした発表を重ね、意見交換を続けていくうちに着想を得て、完全性に関する対比表現の中でも形状表現がどのように意味変化をして強意語となるのかということについて、より深く研究したいと思うに至った。「丸暗記」「丸飲み」等の表現は、単なる動作の完全性を表すだけでなく、本来はもっと吟味するべきであったのに～であるという否定的価値を含んでいることも特徴の一つである。その後、丸や四角等の形状表現についても、調査を行ってきている。これらのことが背景となり、形状という非言語の対比が、形状表現として言語化されている際に、どのような認知のメカニズムがはたらいているのかを解明する必要があるという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究課題「形状表現に注目した対比における意味変化のメカニズム」では、英語と日本語の対比表現の中でも特に「形状」に着目し、意味変化のメカニズムを解明することが目的である。丸や四角といった形状に関する言語表現が、英語や日本語において単なる形状を示すだけでなく、完全性や程度の甚だしさを表す強意語となることがある背景に存在している意味変化のメカニズムを明らかにしていくことを目的とした。完全性、好ましさ、望ましさ、強意(意味を強められていること)を感じるの、どのような要因が背景にあるのか、同定することを目指した。一方で、不完全性、好ましくないこと、望ましくないこと、婉曲であること、控えめであることを感じる場合には、どのような要因が背景にあるのかについても解明を試みた。

3. 研究の方法

日本語の「丸暗記」や「丸飲み」等の表現や、「look me square(ly) in the eyes (しっかり見よ)」等の表現を扱い、いくつかの形状(形状表現)が、他の形状(7角形や11角形、楕円や三日月形等)よりも人間の認知基盤においてより基本的であり、こうした視覚情報が図形の対比における言語表現の意味変化の認知基盤になっていることを明らかにした。また、記述的な言語分析によるアプローチに加えて、NIRS の撮像タスクを加えて分析することで、形状表現の対比における意味変化のメカニズムの認知基盤をできるだけ生理的基盤からも明らかにしていくことを目指したが、データの収集と分析までで研究期間が終了した。本研究の特色は、「形状表現」における完全性を表す強意語の意味変化のメカニズムに注目したところにあった。意味変化の研究は多々あるが、形状表現の意味変化について、強意語や完全性の視点に特化した研究は未だない。最近の関連の深い研究として、寺西隆弘「新体制に基づくイメージ拡張 straightness と crookedness に関わるメタファーを材料として」(日本認知言語学会論文集第9号, 2009, 404-414)を挙げることができる。寺西は HONESTY や DISHONESTY のような概念獲得に、身体感覚が影響を与えていると考えている。しかし、形状認知と強意語・完全性との関係を扱っているものではない。本研究の独創的な点は、形状認識と形状表現の意味変化のメカニズムの一部が、身体感覚を含めた人間の認知基盤や発達心理に根ざしていると予測されるからである。非言語的な要素である「形状」が、言語化されたときに、字義通りの形状を現す意味以外に、どのような意味に変化するのか、その意味変化の動機付けはどのようなメカニズムなのか解明しようとするところに、本研究の独創的な視点がある。人間の認知基盤とともに、

自然界にも形状を構成する自然の摂理のメカニズムも存在している。たとえば、雪の結晶はどれも六角形であり、五角形や十一角形の雪の結晶は存在しない。水素結合が理由である。水分子が気体となり凝結し固化し氷になるが、その際に水素結合の引き合う力は、平面方向に成長するとき、酸素の周りの3つの水素が等価になり、結合の角度が120度となるため六角形の構造となる。また、アイルランドのアルスター州にある世界遺産ジャイアンツ・コーツウェイでは、六角形の石柱が敷き詰められたように見える。この石畳を「巨人が作った土手道」と呼ぶ巨人伝説もあるが、現在では大規模地殻変動によるマグマが原因で溶岩台地が堆積層を何層も作った所に、氷河が地域を覆って台地を削り、海岸線でも海水が凍ってできた氷が岩肌を磨くように削った結果であると明らかになっている。六角形の柱群はマグマが徐々に固まる際にでき、水田から水を抜くと泥の表面に六角形のひび割れが無数にできるのと同じ原理である。六道輪廻や六根清浄等は6を基盤としている四字熟語であり、形状の一部については数字との関係の中で解明されてくることもあると考えている。1はひとまとめ、一息、一丸等の表現から予想されるように完全性や丸との関連があり、2は表裏一体、二律背反のように矛盾関係による統合視点が存在している。3はキリスト教における三位一体（父と子と聖霊）や三つ巴等の表現、また音楽における記譜法で、中世では三拍子を表すのに丸を描いたことから、3と完全性の結びつきがある。4には四角四面、四方八方等の表現があるほか、四角形（特に正方形）の形状を挙げられる。8は八方美人、八つ裂き等の表現があり、その他10や12にも完全性と結びついた意味が存在すると予想された。色彩語彙の意味と同様、言語や文化によって意味基盤に相違が存在すると考えられ、文化的社会的歴史的背景まで含めて研究を行った。様々な形状を見せ、「丸・四角（正方形）、三角、八角形」等と、「ゆがみ、へこみ、11角形」等との認知の違いを比較し、形状が言語化され形状表現となったとき、どのような意味変化があるかと照らし、これらの形状に関する意味変化の認知基盤を解明していくことを目指した。「形状に関する言語表現」と「視覚的刺激としての形状・図形そのもの」との間に、どのような相関があるのか明らかにするため、文化的社会的歴史的要因による意味変化も考慮しつつ、人間が形状を認知する際の「完全性（あるいは程度の甚だしさ）」を感じやすい形状というものの存在が生理学的にも明らかになることで、形状表現に関する意味変化のメカニズムの認知基盤の一部の裏付け同定することを試みた。

4. 研究成果

形状と意味理解に結びつきについて論じ、国際誌（査読付）に掲載したものが、以下の論文である。“On Semantic Shift to intensifiers from the viewpoints of negativeness and completeness, *Syntaxe & Sémantique*, No.13, Presses universitaires de Caen, France, pp.11-27. 平成24年。（単著）ここでは、安定的と感じられる形状が諸言語において強意語になることを明らかにした。さらに、日本認知言語学会において「見込みの有無に関する表現の意味理解とその動機付け—英語における“a slim chance”と“a fat chance”—」、『日本認知言語学会第14回論文集』pp.464-476. 平成26年5月。（単著）を発表した。量として大きなものが必ずしも意味そのものを強めることにつながらず、逆に、意味を逆転させることがある点を指摘した。“a fat chance”が否定の意味が持ちうることになる背景について論じた。今回は扱いきれなかったが、美術や建築等でつり合いが取れて美しいとされる黄金比の使用についても、言語表現との関係を見つきたいという展望を持った。黄金比は対象物の形や構図における安定性の基盤の一つであり、ミロのヴィーナスやパルテノン神殿、ピラミッドなど歴史的建造物の中に見出せるだけでなく、モナリザ等の絵画や音楽作品等にも見出せる。また、商品のロゴを作成するときに黄金比を用いることで人気が出たり、強い印象を残したりことに成功すること（アップル社のロゴ等）が指摘されてきている。完全性や安定性は強意を与えるという指摘を裏付けている。その他、さまざまな英語表現における多義性にも意味変化を経た強意語を見出せた。英語広告表現においても強意語が使用されている。また、防災メッセージも視野に入れ、より効果的な情報伝達にこうした知見が活用できないか検討した。さらに、非現実表現や空間認知における境界に関わる表現がどのように強意語と結びつくか、国内外の学会で発表して分析を重ねた。本研究は、たとえばキリスト教におけるアイコン（図像、icon）や図像解釈学といった背景とも関連しているだけでなく、何かを美しいと感じる心の動きといった心理、学習、発達、進化、自然選択といった内容とも関連している。John D. Barrowが*the Artful Universe* (1995, 2011)の中で説くように、自然環境に適応して生き残ることを可能にさせてくれるような特徴を持っていることが、個体の生存競争に有利にはたらいてきたのだとしたら、こうした特徴が言語における強意語の動機付けの一つになっていたとしても不思議ではない。一方で、前述の文化社会的要因や環境を通じた学習要因の影響を考慮することも不可欠であると考えてに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

有光奈美, 「より伝わりやすい防災メッセージの構築とコミュニケーションの工夫:地震・洪水・交通障害の場合」, 『現代社会研究』No.12. (東洋大学)pp.3-13. 平成27年3月(予定). (単著) 査読無

有光奈美, 「英語における動詞“massage”の意味拡張について」, 『経営論集』No.85. (東洋大学)pp.27-36. 平成27年3月(予定). (単著) 査読無

有光奈美, 「命名と評価に関するカテゴリー化の視点からの分析 商品・絵画・音楽、そして「普通」のプロトタイプ」, 『経営論集』No.84. (東洋大学)pp.113-126. 平成26年11月. (単著) 査読無

有光奈美, 「見込みの有無に関する表現の意味理解とその動機付け—英語における“a slim chance”と“a fat chance”—」, 『日本認知言語学会第14回論文集』pp.464-476. 平成26年5月. (単著) 査読無

有光奈美, 「行動を求められる場面における望ましいコミュニケーションの構築に向けて 災害と医療現場」, 『現代社会研究』No.11. (東洋大学)pp.3-10. 平成26年3月. (単著) 査読無

有光奈美, 「日本語と英語における非明示的否定性と擬似否定性の意味的解釈 「伏」「倒」「節」「省」「歪」「曲」「既」等に関する対照的考察—」, 『経営論集』No.83. (東洋大学)pp.113-126. 平成26年3月. (単著) 査読無

有光奈美, 「価値があるとはどのようなことか—Value, price, costに関する価値評価の認知と接辞による意味反転の動機づけ」, 『経営論集』No.82. (東洋大学)pp.125-135. 平成25年11月. (単著) 査読無

有光奈美, 「英語広告表現におけるメタ言語否定・意味反転・共有知識からの逸脱に関するズレの階層性 言語表現と非言語表現の接点を含めた意味伝達」, 『日本語用論学会第14回論文集』pp.1-8. 平成25年9月. (単著) 査読無

有光奈美, 「『無』と『空』の関連表現と広告表現における“fill the void”の位置付け John Cage「4分33秒」の世界観との接点」, 『経営論集』No.81. (東洋大学)pp.161-177. 平成25年3月. (単著) 査読無

Arimitsu, Nami, “On Semantic Shift to intensifiers from the viewpoints of negativeness and completeness, *Syntaxe & Sémantique*, No.13, Presses universitaires de Caen, France, pp.11-27. 平成24年. (単著) 国際誌、査読有

有光奈美, 「香水のネーミングに関する認知活動とマーケティング 英語雑誌広告における具体事例の量的研究」, 『経営論集』No.80. (東洋大学)pp.151-168. 平成24年11月. (単著) 査読無

有光奈美, 「音韻からの連想を用いた英語広告表現への認知言語学的アプローチ」, 『経営論集』No.79. (東洋大学)pp.139-150. 平成24年3月. (単著) 査読無

有光奈美, 「日・英語の味覚関連表現と経験のドメイン—広告表現における動的な「味」、静的な“taste” —」, 『経営論集』 No.78. (東洋大学) pp.163-176. 平成 23 年 11 月. (単著) 査読無

〔学会発表〕(計 5 件)

有光奈美, 「Pushing the boundaries に関わる強意語の動機付けについて」日本言語科学会第 16 回年次国際大会. 文教大学、平成 26 年 6 月 28 日.

有光奈美, 「見込みの有無に関する表現の意味理解とその動機づけ—英語における“a slim chance” と “a fat chance”—」日本認知言語学会第 14 回大会. 京都外国語大学、平成 25 年 9 月 22 日.

Arimitsu, Nami, “Irreality, negative meanings and intensifiers”, International Congress of Linguistics (ICL) 19, Université de Geneva, Switzerland, 平成 25 年 7 月 23 日.

有光奈美, 「英語広告表現におけるメタ言語否定・意味反転・共有知識からの逸脱に関するズレの階層性」日本語用論学会第 14 回大会. 大阪学院大学、平成 24 年 12 月 2 日.

有光奈美, 「対比と否定性に関する意味のメカニズム」日本フランス語学会談話会「否定があらわすもの、否定をあらわすもの」(招待). 京都大学、平成 23 年 11 月 19 日.

〔図書〕(計 2 件)

有光奈美, 「Yes and No に類する認知メカニズムと対比の全体性について」, 『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』児玉一宏・小山哲治(編) ひつじ書

房. pp.519-532. 平成 25 年 3 月. (共著)

有光奈美, 「対比・形状・数字に注目した日・英語における強意語の意味変化」, 『認知言語学論考』山梨正明他(編) ひつじ書房. pp.247-269. 平成 24 年 3 月. (共著)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
有光奈美
東洋大学・経営学部・准教授
研究者番号：00408957

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：